

編集後記

日曜日の午後、ロンドンはハイド・パークに人が集まり、誰彼となく弁舌を打つ風習があったそうだ。「セイフティ・ヴァルヴ」と呼ばれたその慣習は、ロンドン市民の政治、社会への不満や批判を弁舌にたくして「ガス抜き」させる「安全弁」の役を果たしたという。女性学インスティテュートの機関誌は単なる「セイフティ・ヴァルヴ」であってはならない。本学に在職／在学する教職員／学生の意識改革をさらに促すものであることを期待する。(K. B.)

今年は『女性学評論』の特集も公開講演のシリーズも「女性と犯罪」。同じテーマでインパクトを、という意図が活きたことを願っています。いつものように、ご寄稿くださった方々、編集委員の方々、大黒柱の豊福助手に感謝しながら、「あ、来年はアウトサイダーなんだ……」と感慨無量。本誌の今後のさらなる充実と発展を祈りつつ。(A. F.)

女性の解放の尺度はその社会の解放の尺度である。これはフーリエの言葉でしたか。平和、貧困、環境など、日本社会の自由や解放を示す様々な尺度のなかに「女性の解放」（および／あるいは「男性の解放」）はどう位置づけるのか。ここにねらいを定めた現代社会論としての女性学の大胆な討論を期待したい。(Y. I.)

女性学というさまざまな分野が関わる枠組の中で今どのような研究がなされているのか勉強するよい機会になりました。具体的な社会問題の緊急性、その背景にある構造的矛盾、国際関係の中で露呈してくる様々な差異や方法自体の問題、文化や文学の中で鮮やかにあるいはためらいつつ、捉え返される〈ジェンダー〉。わたしも女性学の海の中へ飛び込み対話。(K. M.)

順番としてまわってきたような編集委員にならなかったら、試みることはなかったと思える研究ノートを書いた。サマリーには、「私たちみんなに関わる女性学」と書くことになった。一行から始めて締切まで書き続ける「楽しさ」を、『女性学評論』が与えてくれた。この流れの「自然さ」で、これからも関わっていけばいいのだろうか。(T. U.)

